

「女性の自然観に関する心理学的研究-自然の中の大いなる存在との出会いを通して-」

岡村宏美(神戸大学大学院)

1. はじめに 研究を思いついたきっかけ

これまでずっと疑問であった事として「現代日本人はいわゆる既製の宗教に対する信仰心や宗教心に関心を持っている人が多くはないという事実=無宗教」なのだろうか??という事がある。そこで本研究では既製の宗教心とは別の形で日本人の宗教性を捉えてみようとして「自然の中に自らを超越した何かの存在や、力を感じる体験(大いなるなにかとの出会い、と本研究では命名する)」についてイメージ画を用いて調査、検討する事とした。

2. 研究の目的

本論文の目的

- 1)日本人女性が自然の中で大いなる何かと出会う体験をしているのかどうかの確認
- 2)自然の中で大いなるなにかとの出会い体験の有無が一般的な心性であるか個別的な生活経験によってあるかの確認(年齢、既成宗教への関心、信仰の有無、過去、現実の自然環境との関わりの多少との関連から)
- 3)大いなるなにかとの出会いの質的側面の検討

3. 調査内容

予備調査

目的

- 1)実際に自然の中で自分を越えた大いなるなにかと出会った経験をどの程度の人がしているかの確認
- 2)本調査での個々人の自然の中で自分を越えた大いなるなにかと出会った経験の想起を助ける例文収集

方法

調査対象者 関西地区の 20 歳-60 歳の女性 38 名(学生 20 名、社会人 18 名)

調査内容

- 1) 自然の中で自分を越えた大いなるなにか(神、もしくはそのようなもの)を感じた経験の有無
- 2) 大いなるなにかを経験した事のある人のみ、その時期を幼稚園~社会人の7期から選択
- 3) どのような状況だったか(以下自由記述)/どのように感じたか

結果と考察

- 1)自然の中で自分を越えた大いなるなにかを感じた経験有 36 名無し 2 名
- 2)自然の中で自分を越えた大いなるなにかを感じた経験をした時期 大学生が半数近くを占めた。
- 3)状況の分類 「空」や「太陽」をはじめとする「気象」に大いなるなにかを感じる割合が最も高かった(44%)。気持ちの分類「大いなるものの存在」を感じる割合が最も高く(30%)、次いで「大いなるものの中に自分を感じる」割合が高かった(19%)。次いで「あたたかさ、心地よさ」といった「+の感覚」の割合が高かった(11%)。
- 4)状況、気持で最も多い割合の分類が組合わさった文章を 3 文選択し、田口ランディ(2001)の文章と併せて 4 文を本調査における例文とした。

* 自然の中で自分を越えた大いなるなにかとの出会い経験を多くの人が行っていることがわかった。状況においては気象に大いなるなにかを感じる割合が高く、気持ちにおいては大いなるものの存在とその中にいる自分自身を感じる事、肯定的な感情を持つ人がいる事がわかった。

本調査

目的

- 1) 予備調査に続き自然の中で大いなるなにかと出会う体験を人々がしているかどうかの確認

- 2)自然の中での大いなるなにかとの出会い体験の有無が一般的な心性であるか個別的な生活経験によってあるかの確認(年齢、既成宗教への関心、信仰の有無、過去、現実の自然環境との関わりの多少との関連から)
- 3)大いなるなにかとの出会いの質的側面の検討(自由記述、イメージ画で描写された状況、気持ちの分類)

方法

有効回答者数 成人前期女性 109 名(平均年齢 26.7 歳)成人後期女性 44 名(平均年齢 47.9 歳)計 153 名

調査期間 2004 年 9 月下旬~10 月上旬

調査地域/手続き 関西(兵庫、大阪)関東(東京、千葉)九州(福岡)

質問紙の構成

1)フェイスシート 性別/年齢/職業/現在の住居/小さい頃の住居の付近の自然、小さい頃自然の中で遊んだ経験、現在の住居の付近の自然に関して「多い」から「少ない」の 4 件法/これまでうけた宗教教育の有無と教育を受けた宗教名、時期/自身や家族の信仰している宗教について

2)大いなるなにかとの出会い体験のイメージ描画導入のための例文

予備調査で得られた例文を提示し、自分がどの文章に一番ぴったりくるかの選択/その理由(自由記述)

3)大いなるなにかと出会った時の大いなるなにかのイメージ画、気持ちのイメージ画 目を閉じて各自の大いなるなにかとの出会い体験を想起して貰い、浮かんだ時点で A4 画用紙 C、D に移った。

画用紙 C には自然の中で回答者自身が出会った「自分を越えた大いなるなにか」のイメージを、画用紙 D には自然の中で「自分を越えた大いなるなにか」と出会った時の回答者自身の気持ちを思い起こして貰い、そのイメージを実際に描いて貰うよう教示した。

4)C、D の描画を元にした自由記述

自然の中で自分を越えた大いなるなにかと出会った時期を幼稚園~社会人、不明の 8 項目からの選択

大いなるなにかと出会った時の状況(以下自由記述)/大いなるなにかとであった時に感じた気持ち/思い起こした経験や気持ちが自分にとってどのようなものか

5)尺度

西脇(2003)の宗教意識尺度(5 件法)

1) 神仏がなんらかの意味で人間に関与しているという意識を表す「神仏の存在的関与」

2) 特定されない宗教一般に対する肯定的な態度を表す「宗教肯定」

3) 神仏観念や宗教態度に集約されない宗教的感性であり、成立宗教以前の素朴な宗教心ないしは民族的な信仰を表す「自然・神秘」の 3 因子

金児(1997)の宗教態度尺度(5 件法)

1) (既成)宗教に対して好意的態度を示すのか否定的態度を示すのかの意識を表す「向宗教性」

2) 風俗や年中行事としての軽い宗教との結びつきに親しみを感じ、自然に敬虔な態度おかげの概念の意識を表す「加護観念」

3) 輪廻転生の概念、死者への畏怖感情、人知を超えた「靈魂観念」の 3 因子のうち向宗教性」を除いた「加護観念」「靈魂観念」の 2 因子

*本研究では因子分析の結果「加護観念」は先行研究のまま、靈魂観念は「輪廻転生」と「靈魂供養」に分かれた。

結果と考察

1) 自然の中で自分を越えた大いなるなにかを感じた経験有が 133 名、無しが 20 名となり、多くの人が自然の中で大いなるなにかとの出会い体験をしていることがわかった。

2) 大いなるなにかとの出会い体験の有無と年齢、既成宗教への関心、信仰の有無、過去、現実の自然環境との関わりの多少それぞれを検討した結果、どの項目に置いて関連が見られなかった。

1),2)の結果により自然の中で自分を越えた大いなるなにかとの出会った体験は日本人女性に一般的な心性である事が示唆される。しかしこの心性が日本人女性独特のものであるかどうかは同じ手続きでの調査

を日本人男性、また外国人にして比較しなければ断定できない為、今後更なる調査が必要であると考えられる。

3) 自由記述、イメージ画の分析から

大いなるなにかと出会う状況」では「太陽」をはじめとする天空の様々な現象が多いことがわかった。また、大いなるなにかとの出会いを通して受ける感情としては出会ったその時の気持ち、それを思い起こしての気持ちいずれにおいてもプラスの感覚を持つ人が多いことがわかった。その内容を見ると前者は「包まれ守られる」「あたたかい」といった「受けとる」気持ちが割合として高く、後者では「こころにプラスの変化が見られた」「自分への気づき」など受け取ったものを自分の中で肯定的なものに変化させる記述が多く見られた。

肯定的な内容(オカゲ)が多い中、一方でわずかではあるが自然の怖しさや自然への畏敬の念(タタリ)をあらわした内容もみられている(全体の約5~15%)。この気持ちは出会ったその時の気持ちの記述(5.4%)よりもそれを思い起こしての気持ちの記述(14.5%)で多く見られ、体験をしたその場よりも出会いの後で畏敬の念の気持ちがあらわれると推測される。また、全体において少なかった理由としては本調査における例文に否定的な内容を伴ったものがなかった事が一因として考えられる。また表面上にはオカゲの念を示す事でタタリの念を鎮めようとする日本人の心性が働いている(会田,1975)とも考えられる。今後の研究では本研究とは異なった方法でオカゲの側面だけでなく、タタリの側面を含めての自然(寺田,1984)の中での大いなるなにかとの出会いを検討する必要がある。